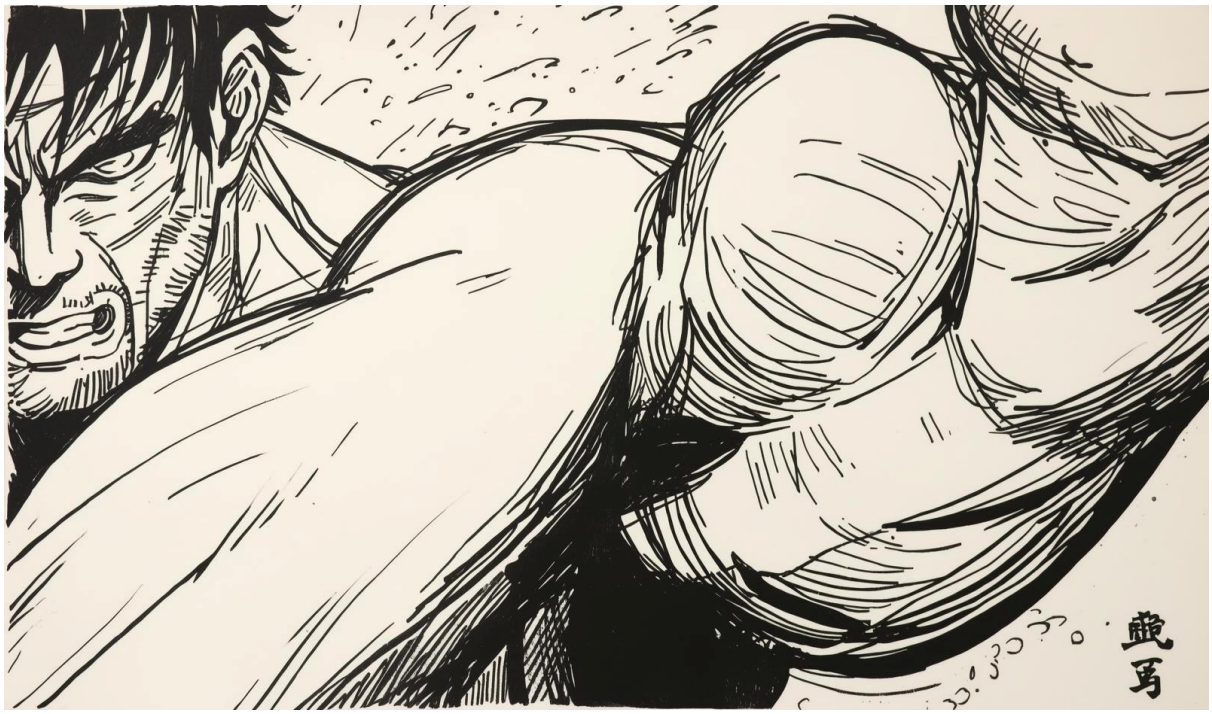
闘腕

TOUWAN



原作脚本:増田貴彦

2026/11/04

闘腕　TOUWAN

企画意図

本作のモチーフはズバリ『**腕相撲**』です。
ここで断っておきたいのですが、腕相撲はアームレスリングとは違います。
アームレスリングは安全面に配慮してルールも厳格化されていますが、その点、腕相撲はアバウトで、とにかく相手の腕を接地させたら勝ちです。
なかでも最大の違いは肘を自由に動かしてもいいことです（もちろん、机から浮かせてはダメですが）。肘をぶつけても、引っかけても問題ありません。
他に机を動かしたり、机の下で相手の足を蹴ることも許容範囲です。
スポーツというよりも荒々しい格闘技といった趣きなのが腕相撲といえるでしょう。
本作はこの日本古来の腕相撲に着目し、そこで鎬を削る闘技者たちにスポットライトを当ててみました。

〇独自性
いままでの日本映画で腕相撲を取り上げた作品はありません。むろん、小説やマンガも同様です。

〇ターゲット
ティーンから 30 代前半までがメインターゲットです。

〇発信力
筋肉タレントや全国のジム経営者、トレーナーなどの方々に出演してもらいます。

物語設定

本作の世界では腕相撲の選手のことを『カイナカ士』と呼称します。骨折などの故障者ケガ人が続出した三年前の全国大会を最後に、腕相撲という競技は表舞台から消えました。
だが、彼らは密かに腕を磨き、競技の再開を信じて日々の暮らしを営んでいます。
平凡なサラリーマンから医者、弁護士、官僚、議員に至るまで、いえばあっと驚くような意外な人物が日常のなかに埋伏しているのです。

ちなみに現実の世界では地方イベントを除き、全国レベルの大会は行われておりません。
ルールの曖昧さから選手の安全を担保できないからです。
どうしてもやりたければアームレスリングに移行せざるを得ないのが現状です。
また、アームレスリングの選手となってもそれだけで生活できるひとは日本には存在しません（大会の賞金も5万から 10 万程度）。
海外に目を向けてもアームレスリングだけで暮らせる選手は 50 人程度といわれています。
他に正業を持つしかないのが現実なのです。

登場人物

二宮壱斗（にのみや・いっと／24）
三年前の全国大会で前年優勝者に敗れ、腕を折られたカイナカ士。
リベンジを誓うも大会は消滅。情熱を持て余す若き熱血漢。

一ノ瀬海（いちのせ・かい／37）
腕相撲大会最後の優勝者。三年連続優勝の無敗無敵のレジェンドだが、いまはひっそりと暮らしている。公共トイレの巡回清掃が主な仕事。ボロアパートに住み、不平不満をいっさい口にすることなく質素で慎ましい毎日を送っている。

三島蓮司（みしま・れんじ／34）
相手選手の腕を折る壊し屋。非合法の賭け腕相撲で荒稼ぎをする闇力士。
骨折の音を耳にするのが大好きな異常者でもある。

四辻秀憲（よつじ・ひでのり／41）
借金取り。一ノ瀬から厳しい取り立てを迫る、かつての腕相撲道場の兄弟子。
コワモテだが家族にはやさしい。意外な人情家の側面もある。

六車大樹（むぐるま・だいき／30）
　五条が経営するアームレスリングジムの最強看板レスラー。
　五条に心酔し、その理論を実践。重量級のカテゴリーで連勝記録を更新中。

五条十夢（ごじょう・とむ／29）
　アームレスリング中量級のヨーロッパ大会チャンピオン。メンズファッション誌の表紙モデルを飾るイケメンスター選手にして全国展開するフィットネスクラブの若き CEO。腕相撲を犬のケンカと蔑み、壱斗の闘志に火をつける。

物語の概要

　この物語の主人公・二宮壱斗は昏い情熱を胸に秘め、ある男をつけ狙っていた。
　その男の名は一ノ瀬海。
　一ノ瀬は三年前の全国腕相撲大会決勝で壱斗の腕を折った男だ。
　彼を追ってとある腕相撲 BAR に潜入する壱斗。
　しかしそこにいたのは賭け腕相撲の三島蓮司だ。
　三島はいわゆる壊し屋で相手選手の骨（上腕骨）を折るのが趣味の異常者だ。
　ひょんなことで三島から言いがかりをつけられ対戦することになる壱斗だが、対一ノ瀬を想定して訓練を積んできた彼にとって三島は敵ではなかった。

　三島を下し、歓喜に沸く店内からこっそり退出する影がある。
　壱斗も店をでて、あとを追った。
　影はやはり一ノ瀬であった。

「一ノ瀬海、勝負だ！！」

　夜空にこだまする壱斗の声。
　だが、威勢がよかったのはそこまでだった。宣戦布告したあと、壱斗は路上にうずくまりゲロを吐いて倒れてしまった。店内で呑み過ぎた。彼は酒に異常に弱い体質だったのだ。
　その姿をみて一ノ瀬は無視して立ち去ろうとするが、思い直して介抱することにした。

　翌朝。
　一ノ瀬のボロアパートで目覚める壱斗。一ノ瀬は壱斗のことをよく覚えていた。
　三年前の腕相撲全国大会で腕を折った選手だ。

「おれをつけ狙っていたのか？」
　と訊く一ノ瀬に二日酔いの頭でうなづく壱斗。
「頼む。おれと勝負してくれ」
　という壱斗を無視して一ノ瀬は仕事にでる。金魚のフンのようについてくる壱斗だが、一ノ瀬の仕事の内容に少なからずショックを受ける。
　彼の仕事は公園などの公共施設トイレの巡回清掃であった。

　全国大会優勝者が公共トイレの掃除人？！

　腕相撲で食っていけないことはわかっていたが、ボロアパートでの暮らしぶりといい、その報われなさ加減には愕然とせざるを得ない。
　一ノ瀬は大会三年連続覇者のレジェンドだ。彼はその栄誉を守るために寝食を忘れてトレーニングに励んできた男だ。その結末がこの境遇とは……。
「わかっただろ。腕相撲では食っていけない。ケチなプライドを守るために三年間打ち込んだ結果が借金漬けのいまの暮らしだ」
　三年前の大会を最後に腕相撲の興行は消滅した。骨折者続出、ケガ人多数の大会運営が猛批判されてスポンサーは撤退。カイナカ士と呼ばれる腕相撲選手は残らずアームレスリングに移っていったのだ。

　ふと、介抱のわけを訊く壱斗。
　実は一ノ瀬は昨夜の BAR の店長に三島潰しを依頼されていたのだ。気の進まぬ仕事ではあったが、BAR の店長は昔世話になった恩人でもあり、また別れた妻への慰謝料、娘の月々の養育費などの請求もある。
　いわゆる汚れ仕事だが、壱斗の登場でやらずに済んだ。そのささやかな礼が昨夜の介抱だと一ノ瀬は正直に語る。

　そこへ借金取りの四辻がやってくる。
　四辻と一ノ瀬は同じ腕相撲道場で修行した兄弟子、弟弟子の間柄だという。
　だがいまは、そんな昔の結びつきなど残ってはいない。娘に渡す養育費までむしり取ろうとする四辻に壱斗は憤慨し、彼の腕を押さえると叫んだ。

「おれと勝負しろっ！！」

　四辻にしてみれば通常業務に従事しているだけだが、見も知らぬやつから面罵されキレ返した。
「上等だ、この野郎！！」

壱斗 VS 四辻の腕相撲勝負がその場ではじまる。
腕を交える舞台は一ノ瀬家のちゃぶ台だ。
そして……

壱斗のおかげで返済はしばらく猶予してもらうこととなった。
勝利の余韻にひたる壱斗に一ノ瀬はいう。

「おまえ、アームレスリングに転向してみてはどうだ？」

意外な言葉であった。そもそも一ノ瀬をはじめとするカイナカ士たちはアームレスリングにはない、腕相撲独特の荒々しさとワイルドな魅力に取りつかれてきたのではないか？
そこで一ノ瀬はメンズファッション誌を壱斗の前に差し出す。表紙を飾るのはアームレスリングにおける新生スター・五条十夢のフォトだ。
五条十夢は全国にフィットネスジムを展開する青年実業家でもあった。彼の発言は SNS で逐一取り上げられ、影響力は絶大だ。
「ある業界が発展するきっかけはスターが生まれることなんだ。ネットだけではない。テレビや雑誌などの露出が多い五条は、間違いなく日本のアームレスリングを勃興させることができる次世代スターだ。これからアームレスリングは一大ブームとなるだろう。おまえなら五条につづくアームレスラーになれる」
四辻との闘いぶりをみて断言する一ノ瀬だが、壱斗は素直にうなづけない。
五条の SNS での発言のなかで、

「腕相撲はただ噛み合うだけの犬のケンカ」

と蔑む発言を見つけたのだ。
この発言に壱斗はキレた。
自分がこれまで打ち込んできたすべてを否定された気がして、五条が経営するアームレスリングクラブに乗り込む壱斗。
あいにく目当ての五条は不在だったが、代わりに出てきたナンバー2を瞬殺で下した。
この一件は SNS や動画サイトでたちまち拡散され、腕相撲が再び注目を浴びることとなり……

なんと三年ぶりに腕相撲の大会が五条フィットネスクラブのスポンサードで開催される運びとなったのである。だがなぜ、泥を塗られた五条側が大会のスポンサーになったかは一抹の疑問が残る。なにか意図があるのでは……？

そんな疑念が残るなか、腕相撲大会は無事開催され、見事、壱斗が優勝した。
壱斗に優勝カップを渡すべく黄金のカップを捧げ持って会場に登場した五条十夢だが…。
彼はそれを壱斗の目の前で放り出し、彼に勝負を挑む。

「きみは腕相撲ルールで闘いたまえ。ぼくはアームレスリングでゆく」

五条十夢の真の狙いは腕相撲の最強とアームレスリングで闘うことで、おのれの競技の正当性と強さをアピールすることにあったのだ。
果たして勝負の行方は……？

闘腕　TOUWAN

〇ゴミ溜めの街（夜）
擦り切れたジャンパーを羽織った男――壱斗が通りの向こうからやってくる。
電飾で飾られたケバケバしい建物の前で立ち止まる。
ハゲ頭の巨漢が椅子に座り、受付入口でじろりと壱斗をにらむ。
壱斗、懐から入場券を取り出し、巨漢に渡す。
「入んな」と目で促す巨漢。
壱斗、玄関へ入りかけるが、引き返して巨漢の前に立ち、その太い二の腕をペタペタと触る。
巨漢「（なんだ？　という目）」
壱斗、がさごそとポケットからしわくちゃの紙幣を出し、巨漢の前の机にたたきつけた。
壱斗「勝負だ」
巨漢「折られても治療費はでねえぜ」
巨漢も紙幣を出した。
ガッ！
セットする壱斗と巨漢。
組み合った瞬間、勝負がはじまって――
巨漢「ぐぬぬ……」

巨漢のハゲ頭と二の腕に筋がはしる。
軋み合う両者の腕。
ぎしぎしと机が音をたてて……。

〇店内（夜）
手にした倍の紙幣をポケットに入れて入店する壱斗。
そこは『腕相撲BAR』。
騒がしいサウンドに乗って半裸の女性が周囲で踊り狂い、その中心部では腕相撲のファイトが繰り広げられている。
その勝負には関心を示さず、きょろきょろと周りの客を見渡す。
壱斗「（みつけて）ッ！」
カウンターで静かに酒を呑んでいる男――一ノ瀬を捉えた。
――と、そのとき、絶叫が響きわたり、男が二の腕（上腕骨の部分）を押さえて床に転がった。
「また、折ったぜ」
「壊し屋蓮司か」
「あんなやつに勝負を挑むのが間違いなのさ」
周囲でひそひそ話が飛び交う。
蓮司「（狂ったようにはしゃいで）ヒャッハー！　お次はどうした？！　このおれに腕を折られたいやつはかかってこーい！」
手にした紙幣の束を傍らの美女の胸の谷間にねじ込んで熱いキスを交わす。
その狂騒に眉をひそめる一ノ瀬。
バーテンがチップをそっと一ノ瀬に差し出す。
そのチップを受け取り、席を立つ。と――
その前に立ちはだかる壱斗。
一ノ瀬「（不審な目を向けて）……」
壱斗「やっとみつけたぜ」
一ノ瀬「どけ」
壱斗「どかねえよ。おれはあんたと勝負するためにここへきたんだ」
にらみ合う壱斗と一ノ瀬。
蓮司「おいおい、なにやってんだ、おめえら。男同士で接吻でもしようってか？　ここはそういう場所じゃねえぜ、にいちゃんたち！」
壱斗「（尖った目を向け）黙ってろよ、既知外！」
蓮司「ああっ、なんだ、この野郎！」
壱斗「（一ノ瀬を指さし）おれはこいつに用があるんだよ！」

その瞬間、ばしゃっと酒を浴びせられる壱斗。
蓮司「だから接吻はよそでやれといってんだろが」
壱斗、ずかずかと蓮司の前までやってきて――
壱斗「あんた、壊し屋っていわれてるんだって？」
蓮司「おお、そうだよ。壊し屋の三島蓮司だ。びびったか？」
壱斗「今日から、おめえの名は『壊され屋』だ！」
ポケットからありったけの紙幣を土俵台（木製のテーブル）に叩きつける。
蓮司「威勢がいいな。にいちゃん、気にいったぜ」
土俵台にあったグラスに酒を注ぎ、壱斗に押しやる。
壱斗、だされた酒に一瞬ためらう。
蓮司「どうした？　毒なんかはいっちゃいねえぜ。それともミルクがご所望か坊や？」
壱斗、ガッとグラスをつかんで一気に飲み干した。
蓮司「おお、いい飲みっぷりだ。じゃあ、はじめようか？」
ガシャン！
そのグラスを持っていた酒瓶でたたき割る蓮司。
壱斗「ッ！」
土俵台一面に散らばるガラスの破片。
散らばった破片の中央に腕を差し出す蓮司。
蓮司「やめてもいいぜ、坊や」
壱斗、即座に腕を出し、蓮司と手を握り合う。
蓮司、蝶ネクタイを締めた行司役に顎をしゃくる。
行司役が進みでて握り合った拳に手をあて――
行司役「カイナ勝負、はじめっ！」
ガッ……ぐぐぐ……！！
ナレ「日本の古来より伝わる腕相撲とアームレスリングは似ているようで根本的に違う。
アームレスリングは安全面に配慮してルールが厳格化されているが、腕相撲はその限りではない。肘を自在に動かしても自由だし、机そのものを動かしても構わない。そして、机の下で相手の足を蹴ることも許容範囲だ」
土俵台の下で壱斗のすねを狙う蓮司。
巧みにその蹴りをかわす壱斗。
土俵台の上下で繰り広げられる激しい攻防。

ナレ「もちろん、肘を接地面から浮かせれば即失格であることはいうまでもない。この荒々しい古式腕相撲を継承するものは極めて希少な存在となり、ひとは彼らを――」

テロップ『カイナカ士』

ナレ「……と呼んだ」

〇オープニングタイトル

黒バックに赤文字の殴り書きの筆致で――

『闘腕　TOUWAN』

〇腕相撲BAR・外観（夜）

その建物の上空。夜空に響く――

蓮司の絶叫！！

受付の巨漢が思わず店内へ目を向ける。

〇同・店内（夜）

血まみれの手をかかえて床をのたうち回る蓮司。

その無様な姿を冷たい目で見下ろしている壱斗。

壱斗「（ハッと気づいて周囲を見回し）ッ！」

目当ての一ノ瀬の姿がどこにもない。

ダッと店を飛びだす壱斗。

〇同・外（夜）

通りに出て、きょろきょろと周囲を見回す壱斗。

壱斗「（みつけて）ッ！」

遠ざかる一ノ瀬の背中を追いかける。

壱斗「待てッ、この野郎！」

立ち止まり、怪訝な表情で振り返る一ノ瀬。

一ノ瀬「（壱斗を見据えて）だれだ、おまえ？」

壱斗「忘れたのか？！　三年前の腕相撲大会の決勝！　その試合でおまえに腕を折られた二宮壱斗だ！」

一ノ瀬「二宮？」

壱斗「一ノ瀬海！　勝負だあッ！！」

と叫んだ瞬間――

壱斗「うぷっ！」

うずくまり、盛大に路上にゲロをぶちまけた。

壱斗「おえええええっ！！」

そのまま白目を剥いて横ざまに倒れる。

一ノ瀬「……」

一ノ瀬、背を返し歩きだそうとするが……。

思い返して壱斗の体をひょいと抱きかかえた。

そのまま通りの向こうに消えて……。

〇ボロアパート・室内（朝）

ぼやけていた目の焦点が次第に像を結んで……。

ばっと起き上がる壱斗。

壱斗「痛ッ！」

頭をかかえる。そこは汚い布団の上。

壱斗、部屋の隅の箪笥の上に飾られてある写真立てに目を留める。

写真に写っているのはピアノを弾いている 10 才の少女。

一ノ瀬の声「気がついたか？」

一ノ瀬が台所から酔い覚ましの水と薬を持ってやってきてちゃぶ台の上に置いた。

壱斗「……あんたが介抱してくれたのか？」

一ノ瀬「他にだれがいるんだ？」

壱斗「（むっつりと薬と水を飲む）」

一ノ瀬「ようやく思いだしたよ。二宮壱斗か。三年前のあの大会でおれは確かにおまえの腕を折った」

壱斗「……あのあと、おれはあんたに負けてヤケ酒を煽った。ほんの一杯だけだったがな」

一ノ瀬「で、昨夜のようなザマになったわけか。おまえ、異常に酒に弱いな」

壱斗「おれはリベンジしたくて、あんたを探していたんだ。世話になっていてなんだが、勝負を受けてくれ！」

一ノ瀬「もう腕相撲大会は開かれていないぜ。三年前のあの大会が最後だ。カイナカ士なんてもう、どこにもいない」

壱斗「いま、この場でも構わない。おれはあんたに勝つため、この三年間、死に物狂いで特訓してきたんだ！」

一ノ瀬「バカかおまえは？　土俵台はどこにある？　このちゃぶ台の上でやるのか？」

壱斗「（台所に目をやり）そこにダイニングテーブルがあるじゃないか」

一ノ瀬「勘弁しろよ。あれはニトリで買ったおれのお気に入りだ。しかもローンがまだ残ってるんだぞ」

壱斗「（再び頭を押さえて）あ…つっ……！」
一ノ瀬「二日酔いだって残ってるだろ。今日一日そこで休んで、明日になったらとっとと出ていけ」
壱斗「（ぼそっと）……あんた、顔に似合わず親切なんだな」
一ノ瀬「顔に似合わずは余計だ」
　　間。
一ノ瀬「……おまえ、昨日の腕相撲BARで三島蓮司をやっつけただろ」
壱斗「ああ、それが（どうした？）」
一ノ瀬「……あれは、おれの役目だったんだよ」
壱斗「役目？」
一ノ瀬「壊し屋蓮司は店の迷惑客だった。対戦相手の腕を折るのが趣味の異常者だ。そんなやつを野放しにしていたら、やがてだれも勝負にはこなくなる。そこで店のオーナーに頼まれておれが仕置きすることにした」
壱斗「……」
一ノ瀬「正直、気が進まぬ仕事だった。やりたくなかった。いくら異常者が相手といえど、ひとの骨を折るのは、その音を聞くのは嫌なものだ」
壱斗「あんたはおれにそれをしたけどな」
一ノ瀬「（ちらりと一瞥するが無視して）代わりにおまえがやってくれた。だからこれは感謝だ。親切じゃない」
壱斗「（部屋をぐるりと見回して）…しっかしボロいアパートに住んでんな。仮にも大会優勝者だろうが。ニトリのテーブルが台所で泣いてるぜ」
一ノ瀬「うるせえバカヤロ！　古式腕相撲はもはや禁止された競技なんだよ。腕自慢はみんなアームレスリングにゆく。おまえもアームへゆけ。それでも食える保証はないがな」
　　腰をあげ作業着の袖に腕を通す。
壱斗「どこへゆくんだ？」
一ノ瀬「仕事だ」

〇公園

　　敷地の駐車場に軽トラがはいってくる。
　　ドアが開いて運転席から一ノ瀬が、助手席から壱斗が出てくる。
　　管理人にあいさつして公衆トイレに向かう一ノ瀬。
　　付いてくる壱斗。

〇公衆トイレ内外

壁や床、便器の清掃を行う一ノ瀬。

それを突っ立って見ている壱斗。

壱斗「大会チャンピオンが公衆トイレの清掃人か」

一ノ瀬「それがどうした？　タワマンに住んで猫でも抱いてろってか？」

壱斗、タワシ棒を手にとり、便器の清掃を手伝う。

一ノ瀬「バイト代はださねえぞ」

壱斗「いらねえよ、んなもん。一宿一飯の恩義ってやつだ」

一ノ瀬「昭和か、おまえ？」

〇モンタージュ

軽トラを転がし、都内の公衆トイレを巡る一ノ瀬と壱斗。

点描を重ねて――

〇ボロアパート・表（夕景）

敷地の駐車場に軽トラを止めて帰ってくる二人。

アパートの入口に人相の悪い中年男が一人、タバコを吸って待ち構えていた。

一ノ瀬「（見て）ッ！」

男の前で立ち止まる。

中年男――四辻秀憲がタバコをポイ捨てし一ノ瀬をじろりとにらむ。

四辻「待ってたぜ」

〇同・室内（夜）

どっかとちゃぶ台の前であぐらをかく四辻。

四辻「茶はいらねえ。とっとと返すもの返してくれたらおれは帰る」

一ノ瀬、四辻の前で正座。

その傍らの壱斗は足を崩している。

一ノ瀬「四辻さん、もう少し、もう少しだけ待ってくれませんか？」

四辻「待てねえな」

一ノ瀬「そこをなんとか。（チラリと箪笥の上の写真立てをみて）娘が私立の中学校にはいりたがっているんです」

四辻「そんなのおれには関係ねえよ」

一ノ瀬「先輩、あんたは娘の名付け親になってくれたひとだ。その娘が、明日海（あすみ）が、ピアノの才能を見込まれて音楽系の学校から進学を打診されているんだ。親としては娘の未来を考えて――」

四辻「（遮って怒鳴りつけ）昔の関係を持ち出すんじゃねえよ！！
なにがピアノだ、ふざけやがって！　おれのガキはグレて少年院だ。
いいか一ノ瀬、この世の中はカネがすべてだ。
夢だの未来だのという代物はカネという土台の上に成り立つんだ。
いつまでも甘いこといってんじゃねえッ！！」
一ノ瀬「（ぐうの音も出ず）……」
四辻「わかったら、さっさと出しな」
　重たい沈黙がわだかまる。
　と……。
壱斗の声「ちょっとの間ぐらい待ってやったらどうなんだよ」
四辻「（尖った目を向け）ああっ、なんだこのガキは？　関係のねえやつは
すっこんでろ！！」
壱斗「（四辻の二の腕を見つめ）なあ、いっちょおれと勝負しないか？」
四辻「勝負？」
壱斗「（腕を差し出し）あんたもやってたクチだろ？　おれが勝てばこの
オッサンの返済をもうしばらく待つ。負ければおれを売り飛ばせ。マグロ
船だろうがなんだろうが乗ってやらあ！」
四辻「少年マンガの読みすぎだバカヤロ！　そんな勝負、だれが受けるか」
壱斗「自信がないんだな」
四辻「なんだと？！」
壱斗「勝てばいいだろうが。マグロで足りなきゃ、この内臓もコミで売って
やるぜ」
一ノ瀬「バカ、やめろ。もういい。この四辻さんはな、おれがチャンピオン
になる前年の――」
四辻「（腕をまくりあげて）ようし、その条件呑んだ。吐いたツバ飲み込む
なよ」
　ちゃぶ台の上に太い腕を差し出した。
壱斗「（同じくまくりあげてガッと手を握り合う）オッサン、行司を頼
む！」
一ノ瀬「どうなっても知らねえぞ」
壱斗「このおれが薄汚ねえ借金取りなんかに負けるかよ！」
四辻「いいやがったなこの野郎！　早く合図をだせ、海！」
一ノ瀬「……わかった」
　一ノ瀬、握り合った拳の上に手を置き――
一ノ瀬「カイナ勝負、はじめッ！！」
　ガッ！！

ギリギリギリ……。
白熱の激闘がちゃぶ台の上で展開。
両者の二の腕に太い筋がはしる。
その勝負をみつめる一ノ瀬。
一ノ瀬の心「壱斗は吊り手のトップロール、対する四辻先輩は噛み手のフック……壱斗の手の甲が上を向けばペースに持ち込める」
ぐぐぐ……。
こめかみに青筋をたてる両者。
押され引かれ一進一退の攻防。
みしみしと音をたてるちゃぶ台。
四辻「てめえ、相当やり込んでやがるな！」
壱斗「おっと絞らせねえよ借金取り！」
巻こうとする四辻の腕を引く。
四辻「このガキ！」
壱斗「フンッ！」
軋む上腕骨。
ついに壱斗の手の甲が上を向いた。
壱斗「む…むおおおお一一っ！！」
四辻「野郎ッ！　ぎっ…ぎぎぎぎぎ！！」
歯を食いしばる四辻。だんだんと押されてゆく。
壱斗「くたばりやがれ一一っ！！」
ダーン！！
ちゃぶ台に四辻の拳をたたきつけた。
ピシッ。
次の瞬間、音をたてて割れるちゃぶ台。
一ノ瀬「勝負あり！　勝者、二宮壱斗！」
軍配を壱斗にあげた。
顔を歪め、腕をさすり手を振る四辻。
ガッツポーズをあげる壱斗。
壱斗「やったぜ、オッサン！」
間。
一ノ瀬「……それより、このちゃぶ台どうしてくれんだ？」
真っ二つに割れているちゃぶ台。
壱斗「（指さし）ニトリのテーブルがあるじゃないか」
一ノ瀬「あれは娘とメシを食うときのものだ」
壱斗「（ハッとなって）…オッサン」

一ノ瀬「一緒に住んじゃいない。週末に遊びにくるんだ。あれはおれの手料理をふるまう特別な食卓なんだよ」
四辻の声「グレずに育ってよかったな海」
　目を向けると、四辻が腕をさすりながら立ちあがった。
四辻「（壱斗をみて）なかなかやるじゃないか、このガキ。こいつはおまえの弟子か？」
一ノ瀬「いや、ただの居候ですよ」
四辻「娘もそうだが、こいつの未来も考えてやれよ」
　そういい捨てると背中を向け、黙ってでていった。
壱斗「なんだあの野郎、急にいいひとぶりやがって。気持ち悪ィ」
一ノ瀬「いや、四辻さんはもともと面倒見のいい先輩だったんだよ」
壱斗「（一ノ瀬を訝しげにみて）……」
一ノ瀬「あのひととおれは、同じ腕相撲道場の兄弟子、弟弟子の関係だった。道場がすたれて、大会も開かれなくなっておれたちは行き場を失った。なあ壱斗、カネがなくなった人間が最後に売り渡すものはなんだと思う？」
壱斗「……」
一ノ瀬「心だよ。心とプライドだ。おまえはおれや四辻さんみたいになっちゃいけねえよ」
壱斗「……オッサン」
　一ノ瀬、隅の書棚から一冊の雑誌を取り出し、壱斗に放り投げた。
　その表紙をみる壱斗。
　筋肉ムキムキのイケメンがポーズを決めている。
一ノ瀬「おまえ、アームにゆけ。アームレスリングをやるんだ。おまえの闘い方はアームに向いてる」
壱斗「だれなんだよ、こいつ？」
一ノ瀬「アームレスリングのニュースター、五条十夢だ。こいつはジムを経営する青年実業家でもある」
壱斗「こいつのジムにでも入れってか？」
　雑誌を放り投げ返した。
一ノ瀬「五条十夢は中量級ヨーロッパ大会のチャンピオンだ。おまえも五条のもとで世界を目指せ」
　また雑誌を壱斗に放り投げる。
壱斗「へ。アームなんざ生ぬるくておれには……（パラパラと興味なさげにページをめくって）ッ！」
　あるページのインタビュー記事に目をとめた。

そこには――

『腕相撲なんて野良犬のケンカですよ』

とのコメント。

壱斗「……わかったよ、オッサン。ちょっくら見学にでもいってくらあ」

腰をあげ、雑誌を手に部屋をでてゆく壱斗。

一ノ瀬「おい！（不安げに見送って）……」

〇五条フィットネスクラブ・外観（夜）

〇同・アームレスリングエリア（夜）

ふらりとやってくる壱斗。

取材のカメラが入り、アームレスラーたちの練習風景を捉えている。

壱斗「（大声）五条十夢ってやつはどこだ？」

いきなりの闖入者に驚き、カメラを向ける取材陣。

じろりと不審の目を向ける練習生たち。

トレーナーの一人が進みでて――

トレーナー「五条にご用でしょうか？」

壱斗「五条にご用の二宮だ」

トレーナー「二宮さん、恐れ入りますがアポはおとりでしょうか？」

壱斗「バカかおまえ。殴り込みにくるやつがアポなんかとるかよ」

その瞬間、ジム内がいっせいにざわつく。

取材陣のカメラが壱斗にズーム。

トレーナー「お引き取り願えますでしょうか？　五条はただいま所要で出ております」

壱斗「いつ帰ってくるんだ？」

トレーナー「もどりはわかりません。今日はもう遅いので――」

壱斗「（途中で遮り）じゃあ、こんなかの一番強いやつとやらせろ！」

トレーナー「わかんないひとだなあ。だれかガードマンを――」

六車の声「おれが相手しますよ」

六車大樹が太い腕をさらしてずいと出てくる。

六車「だれか知らねえが、こういうバカは一度キャインと鳴かせたほうがいいんだ」

壱斗「いうねえ。キャインと鳴くのはどっちかな？」

壱斗、アームレスリングの勝負卓につく。

六車「おれは重量級だが構わないな？」

壱斗「たりめーだ。腕相撲に体重制限はねえ」

六車「そうか。古式か」
　ガッと手を組む壱斗と六車。
　六車の二の腕の太さは壱斗の倍はある。
トレーナー「やれやれ……」
　トレーナー、両者の拳の上に手を置き――
トレーナー「レディ――」
　ぞろぞろとジムの練習生たちが周囲に集まってくる。
　取材陣のカメラも間近に接近して――
トレーナー「GO！！」
　ぐぐっ！！
　吊り手の壱斗は引き寄せようとするが、逆に押し込まれ、手をめくられる。
「六車さん、ファイト！」
「そこだ、巻け！」
「噛めっ！」
「絞れっ！！」
　六車にかけられる熱い声援。
　カメラ、周囲の様子と熱戦の模様を捉える。
　形勢不利の壱斗。だんだんと押し込まれ額に汗。
壱斗の心「つ…強ええ！　こいつチカラだけじゃねえ。技術もある！」
六車「（ニヤリと笑い）どうした？　勢いがいいのはクチだけか？」
壱斗「ぐっ…がっ！　お…おんどりゃあーーっ」
　数ミリ、押しもどすが――
六車「悪いが折らせてもらうぜ」
　ひねりにゆく六車。
　壱斗の上腕骨が軋む。
壱斗の心「だ…だめだ、折られる！」
　と、そこへ――
五条の声「なんの騒ぎだっ！」
六車「（声のほうをみて）ッ！」
壱斗「いまだっ！」
　ダーン！
　アーム卓の面に六車の腕をたたきつけた。
六車「あっ、汚ねえ、こいつ！！」
　勝利のガッツポーズをあげる壱斗。
　五条、つかつかとやってきて、

五条「なんの騒ぎかと訊いている。だれか説明しろ」
トレーナー「（進み出て壱斗に顔を向け）この男が道場破りにきたんです」
五条「道場破り？」
壱斗「おれは殴り込みっていったんだけどな」
五条「（壱斗をみて）きみは何者で、なんだってこんなマネをするんだ？」
　壱斗、ズボンの背に突っ込んだ雑誌を取り出し、五条に放り投げた。
五条「（受け止め）？」
壱斗「古式腕相撲カイナカ士の二宮壱斗だ。あんたが野良犬のケンカだというから、野良犬の流儀でケンカをふっかけにきたのさ」
五条「（雑誌をみつめ、なるほどそういうことかという表情）……」
　間。
　長い間。
五条「……悪かった。謝る」
壱斗「（意外）っ？！」
「五条さん！」
「会長！」
「謝る必要なんてありませんよ、こんなやつ！！」
　周囲から憤怒の声が沸き上がる。
　五条、手で周囲の喧噪を制して壱斗に向き直り――
五条「確かにいい過ぎたことは認める。きみたちカイナカ士を侮辱してすまなかった。許してほしい」
　深く頭をさげる五条。その様子を捉えるカメラ。
六車「（カメラの前に立ち）やめろ、映すな！」
壱斗「（五条に）謝罪なんかいらねえ。おれはあんたと勝負がしたいんだ」
五条「それよりももっといい方法がある」
壱斗「？」
五条「ぼくの協賛で古式腕相撲の大会を開かせてほしい」
壱斗「っ！」
五条「五条フィットネスクラブプレゼンツ、古式腕相撲全国大会。賞金総額は三百万。試合模様はうちの YouTube チャンネルで実況生中継される。うちのチャンネルの登録数は百万人を超えてるから、きっと話題を呼ぶはずだよ」
壱斗「おまえは出ねえのかよ？」
五条「ぼくはいま、都内にもう一店舗出店する事業で忙しいんだ。
代わりにこの六車を出そう。六車大樹、重量級の日本チャンピオンだ。構わないだろ？」

壱斗「うーん。こいつにはいま勝ったばっかしだしなあ」
六車「ふざけるな！　あんなの騙し打ちじゃねえか！」
五条「それを言い訳というんだ。負けは負け。リベンジしろ」
六車「（不承不承うなずいて）…わかりました」
五条「（壱斗に）いいだろ？」
壱斗「……仕方ねえ。で、いつだ？」
五条「早急に準備を進める。告知活動は全面的にうちが請け合おう。おそくとも三か月後。8月の中旬を目途に開催する」
壱斗「真夏の決戦てやつだな。わかったぜ。破るなよ」
　　背を返し、ゆうゆうと引きあげていった。
六車「（見送り）あの野郎……もう少しで……」
壱斗「そうだ。だが、楽しみは三か月先までとっておけ。大舞台で折ればいい」
六車「…なるほど、そういうことですか。了解しました」
　　ニヤリとほくそ笑む。

〇同・外の大通り（深夜）
　　駅に向かって歩いている壱斗。
　　星空の下、急にうずくまり――
壱斗「（腕をさすり）あの野郎、マジで折りにきやがった」
　　苦痛に顔をしかめて……。

〇ボロアパート・外観（翌朝）
　　一ノ瀬に報告に訪れている壱斗。
壱斗「……というわけで、三年ぶりに腕相撲大会が開かれることになった。おれに感謝しろよオッサン」
一ノ瀬「少々、強引が過ぎやしねえか？」
壱斗「強引だろうがなんだろうが、腕相撲はまだ死んじゃいないんだ！　この大会が話題を呼べば、またオッサンやおれみたいなやつに関心が集まる。競技として注目される、これはチャンスなんだよ」
一ノ瀬「……（チラリと写真立てをみる）」
壱斗「…考える必要なんてねえ。しかも賞金総額は300 万だ。出るだろ、オッサン」
一ノ瀬「……わかった。出るよ」
壱斗「そうこなくちゃな。じゃあな、あばよ」
一ノ瀬「あばよっておまえ、どこへいくんだ？」

壱斗「これからオッサンとおれは敵同士だ。仲良しコンビ解散！」
一ノ瀬「元々、おれとおまえは仲良しでもなんでもないじゃないか。連絡先ぐらい知らせろよ」
壱斗「しょうがねえなあ。line の交換ぐらいしとくか」
スマホを取り出す壱斗。
一ノ瀬「（同じくスマホをだして）えーと、これってどうやるんだっけ？」
壱斗「チッ。これだから昭和オヤジは……」
一ノ瀬「ギリ平成だ、バカヤロ」
スマホを突き合わせて……。

○照りつける灼熱の太陽
テロップ「三か月後――」

○五条フィットネスクラブ総本部・外観
炎天下、Tシャツ姿の猛者たちが太い二の腕をさらしてぞくぞくと集まってくる。

○同・ホール会場
取材陣のカメラが総勢 32 名のカイナ力士たちの面々を捉える。
客席はそれぞれの力士たちの応援横断幕や垂れ幕でにぎやか。
立錐の余地もない大盛況！
実況アナウンサーの西表響子（いりおもて・きょうこ）がマイクを持ってカメラの前に立つ。
響子「こちら実況の西表響子です。さあ、ついにやってきました、古式腕相撲全国大会。日本全国から文字通りの腕自慢たちが、カイナ力士たちが、この五条フィットネスクラブ総本部のホール会場に集まってきました。これから真夏の太陽よりも熱い熱戦が繰り広げられようとしております」
番号8番の札をつけた一ノ瀬が客席をキョロキョロと見渡している。
番号 16 番の札をつけたカイナ力士が横にスッと並んで――
壱斗「いまは試合に集中しろよ。オッサン」
一ノ瀬「…ああ、わかった」
選手のなかには4番の番号札をつけた壊し屋蓮司。ごつい体格の六車大樹（13 番の番号札）が目を光らせている。
進行役「A組の各選手はそれぞれ所定の土俵台についてください」
中央に八台の土俵台が置かれ、A組選手たちが台につく。
一ノ瀬が相手選手と手を握る。

　　それを間近でみつめているB組の壱斗。
　　試合開始を告げる拍子木が打ち鳴らされた！
響子アナ「さあ、はじまりました。A組選手たちによる一回戦第一試合。
　おっと、早くも勝負を決めたのは――」
　　ダーンと速攻で相手選手を倒す一ノ瀬。
壱斗「やるな、オッサン」
響子アナ「三年前の全国大会覇者である一ノ瀬海！　まさに貫禄の圧勝！」
　　六車も、三島も勝利を決めた。
響子アナ「つづいてB組。この組には無謀にもヨーロッパ王者である会長・
　五条十夢に闘いを挑んできた二宮壱斗の姿もあります」
壱斗「なんだと、このブス！」
　　BOO！
　　五条側の客席からいっせいにブーイング！
一ノ瀬「落ち着け壱斗！」
壱斗「わーってるよ。（土俵台に腕を差し出し）さあ、きやがれっ！」
　　相手選手、やりづらそうに腕を差し出し――
　　拍子木が鳴る。
　　瞬間――
　　ダーン！　と響く打突音。
　　あっという間に勝負を決める壱斗。
　　×　　×　　×
　　モンタージュ。
　　つま先の尖った靴を履き、台の下で相手のすねを蹴りあげる蓮司。
　　剛腕で相手選手の腕を台ごとたたき割る六車。
　　腕を押さえ、担架で運ばれてゆく選手たち。
　　×　　×　　×
　　トーナメント表。
　　順当に勝ちあがる壱斗と一ノ瀬。
　　試合は早くも準決勝に突入！
　　×　　×　　×
　　土俵台が片付けられ、一台のみとなる。
響子アナ「試合は早くも二組に絞られました。ここからは土俵台はこの一台
　のみとなり、呼び出しもついて一戦一戦を集中してお楽しみいただけるよ
　うになっております！」
呼び出し「東、カイナカ士、一ノ瀬海」
　　沸き返る客席。

　　万雷の拍手と声援が会場に響き渡る。
呼び出し「西、カイナ力士、壊し屋蓮司」
　　BOO！
　　ブーイングの嵐を浴びる蓮司。
　　台に進みでる両者。
　　蓮司、その右手には傷跡。
蓮司「おまえ、あの跳ねっ返りを弟子にしたそうだな。弟子の分まで礼をさせてもらうぜ」
一ノ瀬「あいつはおれの弟子じゃない。元・居候だ」
蓮司「なんでもいい。この手がうずきやがるのさ。早く壊したいってな」
　　腕を差し出す。その手の爪には真っ赤なマニキュアが塗られている。
一ノ瀬「おまえ、病院いけよ。外科じゃなく心療内科でみてもらえ」
蓮司「うるせえ！　早く握れッ！！」
　　一ノ瀬、台の下でタップを踏んでいる蓮司の白い靴をチラリとみる。
　　鋭利に尖った靴先。
　　ガッと手を握り合う両者。
行司「カイナ勝負、はじめッ！」
　　ぐぐっ！！
　　両者、一歩も引かず、力と力の押し合い。
蓮司「（その眼がキラリと光って）」
　　土俵台の下、尖った靴を思いっきり一ノ瀬のすねにぶつけた。
一ノ瀬「（ニヤリ）」
蓮司「すね当てか？」
　　蓮司の手をめくる一ノ瀬。一気に押し込もうとする。
蓮司「（懸命に耐えて）ぎっ……！」
　　傾斜する蓮司の腕。
壱斗「そこだ、オッサン！　一気に押し込め！！」
　　ぐぐぐぐっ……。
　　もう少しで接地する、そのとき――
一ノ瀬「ッ！」
　　一ノ瀬の手から血が滴る。
　　一ノ瀬の手に爪を立てている蓮司。
壱斗「卑怯だぞ、てめえ！！」
蓮司「うるせえ！　古式は肘を浮かせさえしなきゃオール OK なんだよ！」
　形勢逆転！　巻き返す蓮司。
一ノ瀬の心「う…腕が……。おまえ、爪に毒を塗ったな！」

蓮司「へ。なんのことだか」
　一ノ瀬の視界。だんだん焦点が合わなくなってくる。
　傾斜する一ノ瀬の腕。
　接地面へと押し込まれてゆく。
壱斗「オッサン！」
一ノ瀬「……もうダメか」
　諦めそうになった、そのとき――
明日海の声「パパ、頑張って！！」
一ノ瀬「ッッ！！！」
　壱斗、その声に振り向き、客席をみた！
　四辻が明日海を連れて客席に座っている。
壱斗「オッサン、娘ちゃんがきてるぞ、借金取りのオヤジも一緒だ！」
一ノ瀬「あ…明日海！」
明日海「パパーーッ、しっかりーーっ！」
四辻「巻き返せ、海ーーっ！」
　二人の声援が周囲の客に伝播して――
「いっちのせ！」
「いっちのせ！」
「いっちのせ！」
　一ノ瀬の大コール！！
一ノ瀬「がっ……うっ…うおおおおおおーーーっ！！！」
　巻き返す一ノ瀬。
　大声援が波となって一ノ瀬をつつむ。
　押し戻されてゆく蓮司。
蓮司「そ…そんなバカな？！」
　再び傾斜する蓮司の腕。
壱斗「そこだ、押し込め、オッサン！！」
一ノ瀬「フン！　むおおおおーーっ！　どりゃあああああ！」
　ダーン！！
　土俵台にたたきつけられる蓮司の拳。
　台にめり込む手。傷跡が開いて血が飛び散る。
　手を押さえ、その場にうずくまる蓮司。
行司「勝負ありっ！　勝者、一ノ瀬！！」
響子アナ「な、なんとも凄惨な試合となりました。両者、拳は血まみれ。
　まさに激闘！　この荒々しさが古式腕相撲の醍醐味でしょうか？！」

大歓声の嵐のなか、傷ついた拳をバンダナで巻いてガッツポーズをあげる一ノ瀬。

振り返って客席をみる。

明日海が手を振っている。

それに応え、手を振り返す一ノ瀬。

響子アナ「決勝へは一ノ瀬海選手が進出。残る一枠を巡る闘いがこれからはじまります」

呼び出し「東、カイナ力士、二宮壱斗！

西、五条アームレスラー、六車大樹！」

壱斗「よっしゃー！」

勢いよく飛びだしてゆく。

静かに立ちあがり、貫禄の態で土俵台にのっしと歩いてゆく六車。

響子アナ「さあ、準決勝第二戦、我らが六車大樹が出て参りました。六車選手はこの大会唯一のアームレスラーです。ワイルドな古式腕相撲にどう立　ち向かってゆくのでしょうか？　注目の一戦です！」

「六車先輩、頑張ってーーっ！」

「瞬殺よ、瞬殺！！」

響子アナ「女子部からも黄色い声援が飛んでいます。さあ両者、ガッチリと手を組み合いました」

行司「カイナ勝負、はじめっ！」

ぐぐっ！！

沸騰する客席。白熱する応援！

土俵台の上は一進一退の攻防が展開。

力任せのサイドアタックにゆく六車。

壱斗の心「こいつの本領は噛み手。きっと押し込みにくるはず」

六車の心「どうせ吊り手で引いてくるはず。エサを撒いてやるか」

壱斗「……」

〇回想・一ノ瀬の部屋

互いのスマホで line の交換をする壱斗と一ノ瀬。

壱斗「（腰をあげ）…じゃあな」

一ノ瀬「待て」

壱斗「なんだよ、まだあんのか？」

一ノ瀬「餞別だ。腕相撲の奥義を特別に教えてやる」

壱斗「奥義？　おまえはもう死んでいるってやつか？」

一ノ瀬「茶化すな。黙って聞け」

〇回想からもどって・元の会場

　　サイドアタックから噛み手に切り替える六車。押してきた。

一ノ瀬の声「（オフ）いいかよく聞け。腕相撲の妙諦は引かば押せ、押さば押せ、だ。相手の動きに惑わされるな」

　　壱斗、小指を六車の手首に巻きつける。

六車の心「こいつ、おれの尺骨に指を……？！」

　　逆に押し返す壱斗。

壱斗「握力てのは小指が一番大事なんだぜ」

　　めきめきめき……。

　　六車の拳が鳴る。

六車「ぐっ！　このガキ！」

　　六車の親指を外側に倒す方向にひねる。

　　曲線軌道を描く腕と腕。

六車の心「噛み手に変えた！？」

　　徐々に傾斜してゆく六車の腕。

響子アナ「お一一っと、六車選手、押されています。これはどうしたことでしょうか？！」

　　そこへ五条がやってくる。

響子アナ「あ、会長！」

五条「つづけて」

響子アナ「は、はい。たちまち劣勢に陥る六車選手。どうした六車選手、頑張れ、会長がみてるぞ一一っ！！」

五条「（冷徹な目で闘いをみつめて）……」

「六車先輩、頑張れ一一っ！！」

「ファイト一一ッ、六車ァァァ！！」

　　五条側の悲鳴のような声援がこだまする。

　　珠の汗を額に浮かべる六車。

六車「がっ……ぎぎぎぎぎ」

　　凄まじい歯ぎしり。

　　上腕骨が音をたてる。

五条「（叫んで）やめろ六車！　腕が折れるぞ！！」

　　ダーン！！

　　土俵台に六車の腕をたたきつける壱斗。

行司「勝負ありっ！　勝者、二宮！！」

　　カイナ力士の応援席で歓声が炸裂！！

腕を押さえ、うずくまる六車。

振り返る壱斗。

バンダナを巻いた手で親指を立てる一ノ瀬。

響子アナ「な…なんということでしょう。我が五条が誇る精鋭、アームレスリング日本大会重量級の覇者が無名のカイナカ士に敗れてしまいました。信じられません。これは悪夢です。なにかの間違いです」

壱斗「うるせえぞ、このドブス！」

一ノ瀬「壱斗！　ナイスだ！」

サムアップでこたえる壱斗。

響子アナ「図らずも決勝戦はカイナカ士同士の闘いとなってしまいました。一ノ瀬 VS 二宮。果たしてどちらが腕相撲日本一の栄冠を手にするのでしょうか？」

呼び出し「東、一ノ瀬海。西、二宮壱斗」

中央の土俵台に進みでる両者。

一ノ瀬の手に巻いたバンダナには血がにじんでいる。

苦痛に顔をしかめている一ノ瀬。

壱斗「……オッサン」

明日海の声「パパーー頑張ってーーっ！！」

四辻の声「頑張れ、海ーーッ」

行司「両者、手を組んで」

土俵台に腕を差し出し、台中央でがっちりと手を組む。

行司「カイナ勝負、はじめっ！」

ぐぐっ！

ぎしぎしと台が音をたてる。

押し込まれ、傾斜する壱斗。

壱斗の心「す…すげえ！！　やっぱりオッサンは腕相撲の王者だ！」

壱斗「フン！」

持ち直す壱斗の腕。もとの位置にまで立て返す。

〇客席

身を乗り出して見つめている明日海と四辻。

明日海「（四辻をみて）オジサン！」

四辻「大丈夫、パパは勝つ。海は無敵だ」

〇ステージ

巻いたバンダナから血がにじみだす。

眉根を寄せ、苦悶の表情の一ノ瀬。
その視界、焦点がぼやけてくる。
壱斗の心「オッサンの握力が……」
壱斗、キッとまなじり決して倒しにゆく。
押し込まれてゆく一ノ瀬の腕。
壱斗の心「もうひと押しだ、もうひと押しで勝てる！」
と、そのとき――
一ノ瀬「明日海……」
壱斗「っ！」
× × ×
フラッシュバック。
一ノ瀬「娘が私立の中学校にはいりたがっているんです」
一ノ瀬「その娘が、明日海（あすみ）が、ピアノの才能を見込まれて――」
一ノ瀬「親としては娘の未来を考えて――」
× × ×
ピタ。
接地面の数センチ上でとまる壱斗の押し手。
響子アナ「お一一っと、これはどうしたことでしょう？！
二宮選手、あと少しというところで手をとめた。カイナカ士同士のこれは八百長かあ？！」
「どうしたあ、腕をとめるなっ！」
「さっさと決めろ一一っ！」
客席から非難の声が飛ぶ。
すると――
四辻の声「バカヤローッ、海のプライドを傷つけるんじゃねえ一一っ！！」
壱斗「（ハッとなって）ッ！！」

○回想
一ノ瀬「なあ壱斗、カネがなくなった人間が最後に売り渡すものはなんだと思う？」
壱斗「……」
一ノ瀬「心だよ。心とプライドだ。おまえはおれや四辻さんみたいになっちゃいけねえよ」

○回想あけて
壱斗「……」

力を失った一ノ瀬の手を静かに台に押し当てた。

行司「勝負あり！　勝者、二宮壱斗！！」

軍配を壱斗にあげた。

拍手と歓声が沸き起こる。

〇客席

泣いている明日海。

その肩を抱く四辻。

〇ステージ

ずるずるとその場に崩れ落ちてゆく一ノ瀬。

壱斗「オッサン！（周囲を見回し）担架だ、だれか担架を持ってきてくれ！」

気を失っている一ノ瀬。

担架に乗せられ運ばれてゆく。

万雷の拍手に見送られて会場の外へ消えていった。

壱斗「（見送って）……」

そこへ、つかつかと優勝トロフィーを持ってやってくる五条。

五条「見事な闘いだった。優勝トロフィーだ。受け取ってくれたまえ」

優勝トロフィーを壱斗に向かって差し出す。

手を伸ばす壱斗。

渡すその寸前でトロフィーを床に放り投げる五条。

壱斗「？！」

五条「…と、その前にもう一戦、ぼくと闘ってくれないか？」

壱斗「てめえ、なにを――」

五条「きみはもともとぼくを倒しにきたはずだろう？　このままでは五条ジムとしても終われない。この勝負、受けてくれたら賞金総額を倍に増やそうじゃないか」

壱斗、客席にいる明日海と四辻をちらりとみる。

壱斗「……わかった。受けようじゃねえか。おめえがいってた野良犬のケンカでゆくぜ」

五条「（腕をまくって）構わない。さあ、はじめよう」

土俵台に腕を差し出す両者。

がっちりと手を組み合う。

行司「カイナ勝負、はじめっ！」

ぐぐっ！

大歓声のなか、白熱の闘腕がはじまって――

〇黒バック

テロップ「一か月後――」

〇空と海

右腕を三角布で吊って海を眺めている壱斗。

そこへ――

一ノ瀬の声「どうだ、決心はついたか？」

一ノ瀬が壱斗のいる突堤にやってくる。

壱斗「ああ。おれはアームにゆく。今度はやつの土俵で闘ってやる！」

一ノ瀬「腕はどうなんだ？」

壱斗「こんなの、もうなんでもねえ！」

三角布をむしり取り、風に飛ばす。

壱斗「（立ちあがり）コーチ兼トレーナー、よろしく頼むぜ、オッサン！」

一ノ瀬「ああ、面倒みてやるよ」

がっちりと固い握手をかわす二人。

壱斗「……痛ッ」

一ノ瀬「この野郎、まだ治ってねえじゃねえか」

爽やかな笑顔で笑いあって――

おしまい。